

地域移動と文化実践との関係性

——「文化と意識に関する全国調査」の分析をとおして——

明星大学 小股遼

1. 目的

本報告では、現代日本において地域移動に文化実践が関係しているかを明らかにする。ブルデューは、パリと地方との差を様々な形で指摘しており、地方出身者の言語資本や身体的な資本の不利な状況と、その中で過剰選別による優秀さや生真面目さなどを指摘していた。ポストブルデューの視座（『文化・階級・卓越化』2017）から、通信技術や交通・流通インフラとシステムの発達によって、『ディスタンクシオン』の時代より中央と地方との文化的差異は縮小していると考えられる状況において、その差について地域移動を焦点にして検討することでもある。

ここでの地域移動とは、農村と都市との生活様式の違いを想定した農村 - 都市間の移動と、地域で文化や生活様式が異なることを想定した地域ブロック間移動と、二つの移動タイプで捉えている。中央 - 地方間の差異は、農村と都市との違いの場合もあれば、都市から都市への移動で、単に地域文化の違いのみの場合や、またその両方を含むこともある。地域移動を、農村 - 都市間の移動と、地域ブロック間移動とに分けた上で、双方の視点から文化実践との関わりを明らかにする。移動と文化実践に何らかの関係は見いだされるのだろうか。

2. 方法

2019年1月末～3月に、層化2段無作為抽出法でサンプリングして実施した「文化と意識に関する全国調査」のデータを分析する。母集団は、18歳～60歳未満（2019年1月1日時点）の男女で、郵送法による質問紙調査で4000名に配布し、1272名の有効回答（32.0%）を得た。男性508名、女性764名で、男女比や年齢構成はサンプル全体とほぼ一致していた。地域移動の経験を測定するために、中学3年生時点で住んでいた場所を都市か農山村地域か聞いた回答を出身変数として都市と農村とに分類し、次に現住地の都市規模を都市と町村にリコードした上で、出身と現住地から、都市→都市、都市→町村、農村→都市、農村→町村の4つの移動パターンを析出した。また地域ブロック間移動は、47都道府県と海外を11ブロックに分け、中学3年生時に住んでいた地域ブロックと現住地の地域ブロックから、同じブロック内に留まる定住者と、違うブロックに住む移動者と2つを析出した。これらの移動パターンと各文化実践の回答をクロス集計した結果から有意なものを検討する。

3. 結果・結論

移動パターンと基本属性とで検討すると、本人学歴・年齢・性別・収入では有意な差異は見られず、基本属性による偏りはほぼ見られなかったが、両親の学歴は移動パターンと関係していた。文化実践との関わりでは、大きな差異が見られるものは多くなく、地方と中央との文化的差異が縮小していると考えられる。また有意な関係性が読み取れたものも、移動による効果と考えられるものよりも、出身そのものによって文化実践に差異が見られることが多かった。例えば旅行や食べ歩きは、都市出身である方が農村出身よりも10%程高い回答を示す。移動効果が読み取れる数少ない文化実践は音楽や美術関係に集中し、現代美術が好き、楽器を演奏する、センスの良い振る舞いを心がけるなど、ブルデューが身体化された文化資本として定義したような文化実践との関係性が浮かび上がった。地域ブロック間移動では、文化実践との関係性はほとんど見られず、地域移動という点では、地域文化の差異というよりも、農村一都市の差異の方が重要であると結論づけられる。